

炎(C-CH)74例を対象として、臨床病理学的検討を加えた。AIHは女性に多く、高齢発症で、臨床検査データや自己抗体の頻度はAIH群でより活動性であることをうかがわせる値を示し、C-AIHはAIHとC-CHの中間の値をとることが多かった。C-AIHとC-CHの間にHCV遺伝子型の差はなく、インターフェロン治療に対するウイルス学的著効率にも差はみられなかった。組織学的にはAIHで活動性を示すHAIスコアのコンポーネントIおよびIIの値が有意に高かったが、門脈域におけるリンパ濾胞様細胞浸潤の程度はC-AIH、C-CH群で強かった、AIHスコアはAIHと他の2群を鑑別するのに有用だった。

23) 内視鏡的食道静脈瘤硬化療法前後における体外式腹部超音波による門脈系血流の比較

馬場 靖幸	・ 本山 展隆
渡辺 雅史	・ 和栗 暢生
望月 剛	・ 夏井 正明
新井 太	・ 小林 正明
杉村 一仁	・ 本間 照豊
成澤林太郎	・ 青柳 均
朝倉 均	

(新潟大学第三内科)

当科にて内視鏡的食道静脈瘤硬化療法(EIS)を施行された11症例を対象に、体外式腹部超音波パルス・ドプラー法を用い、治療前後での門脈系血流量(門脈・脾静脈・上腸間膜静脈)の変化を比較検討した。EIS後の血流量は、いずれの血管でも増加を示したが、脾静脈では有意差をもって血流量の増加が認められた($p < 0.05$ Paired t-test)。さらに治療成績との比較では、硬化剤をより供血路中枢側まで注入できた症例ほど脾静脈血流量の増加率が高い傾向を示した。今後は、症例の追加と長期的な観察を続け治療効果・静脈瘤再発との関連性を検討して行きたい。

II. 特別講演

「肝臓の発生・分化・再生と肝細胞移植」

秋田大学医学部生化学第一講座教授

杉山俊博先生

第5回新潟周産母子研究会学術講演会

日時 平成9年10月25日(土)

午後2時より

会場 新潟大学医療技術短期大学部

D 41講義室

I. 一般演題

1) インドメタシン療法を施行した未熟児動脈管開存症の5例

長崎 啓祐・星名 哲(鶴岡市立荘内病院)
吉田 宏・伊藤 末志(小児科)

1994年12月に、わが国でも静注用インドメタシンが未熟児動脈管開存症の薬学的閉鎖療法薬として認可された。以来当科でも、5例の未熟児動脈管開存症に対して、インドメタシン静注を行った。適応に関しては、CVDスコア及び心エコー所見も参考にした。全例とも重篤な副作用なく、動脈管の閉鎖を確認した。副作用としては、尿量減少、尿素窒素・クレアチニンの上昇の他、消化管出血、血小板の低下を認めたが、いずれも一過性であった。当科では、インドメタシン使用時には禁乳にしdopamine, furosemideを併用し、現在まで幸い良好な結果を得ている。静注用インドメタシンは未熟児動脈管開存症に対して非常に効果の高い薬物であるが、重篤な副作用も多数報告されており、今後はその適応基準、投与時期・投与量に関してのさらなる検討が必要と思われた。

2) 胎児頻脈にて発見され電氣的除細動により救命しえた心房粗動の1例

山田 謙一・郡司 哲己(長岡中央総合病院)
大石 智洋・松井 俊晴(小児科)

胎児頻脈にて発見され、電氣的除細動により救命しえた、新生児心房粗動の1例を経験したので報告した。標準12誘導心電図及びATP 0.3 mg/kgの静注により2:1伝導の通常型心房粗動と診断し、電氣的除細動の適応と判断した。小児循環器専門医のいる長岡赤十字病院に緊急転送し、5Jにて除細動を施行して正常洞調律に復帰した。迅速な診断と、地域医療圏のセンター病院の緊急受け入れ体勢の連携による治療処置が効を奏した適例と考えられた。